
リリカル OO RFS 1

八兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル O O R F S 1

【Nコード】

N 8 7 1 5 K

【作者名】

八兔

【あらすじ】

はじめまして、こんにちわ、こんばんわ、八兔と言います。

これはOOとリリカルなのはクロスオーバー小説 二次創作です。

刹那とロックオンとイアンとシェリリンとハロとアカハロが機動六課初出勤時に転送。

主に（一方的な）イオリアの宿題（どんな？）終わらせるまで元の世界に戻しません、なプログラムとの闘い。

作者の中途半端かつ偏った知識をもと製作されています。偏見の

よ^うな考^え方^が文^章に表^れてい^ます。そ^のた^め、高^校生^以下^の方^は
ご遠^慮願^いま^す。お願^いし^ます。

1話（前書き）

はじめまして、こんにちわ、こんばんわ、八兔と言います。

これはOOとリリカルなのはクロスオーバー小説 二次創作です。

刹那とロックオンとイアンとシェリリンとハロとアカハロが機動六課初出勤時に転送。

主に（一方的な）イオリアの宿題（どんな？）終わらせるまで元の世界に戻しません、なプログラムとの闘いの冒頭です。

まだ、転送してません。

1話

現在、C Bは活動を停止している。実際には小規模の介入行動を行っており、それがC Bだと認識されていないだけである。また、組織内ではガンダムの開発と修繕、人員の整理、経済の立て直しなども行われている。

その日、刹那・F・セイエイ、イアン・ヴァステイ、シェリリン・ハイドの三名はO Oセブンソード/Gの性能実験を終えたその足でロックオン・ストラトスを拾って、ファクトリーへ向かっていた。操舵を交替で行い、空いた時間に休憩や食事を取る。他にも行った実験のまとめや定期整備などやることはたくさんあるから、のんびり宇宙旅行とはいかない。

刹那とロックオンが主に操舵を請け負い、イアンとシェリリンは実機の整備と武装の調整とそれらのレポートを行う。イアンは一番弟子のシェリリンに整備を任せ、「ヴェーダ」内のティエリア・アーデから送られたデータの解析を行っていた。

それは帰ってから行ってもよかったのだが、今日行った実験で機体が全く刹那に合っていなかったため、早急に刹那用の機体を構成しなおす必要が出たのだ。合わない機体で出れば命を落とす危険がある、それは許されないことだ。メカニックとして、整備も開発も万全を尽くす。かつてのような悲劇は二度と起こってほしくないと願う努力する。

普段、クルー達に見せない必死さで画面を追っていたイアンの目と手が止まる。

（なんじゃこりゃ？）

送られてきたデータの一つに文字化けしたような数字と記号と文字の羅列があった。暗号かなにかかと解析を続けるがさっぱりわか

らない。あーでもない、こーでもないと悩んでいるうちに来客を告げるランプがついた。イアンがドアを開ければ刹那が入ってきた。

「イアン、レポートを持ってきた。他にシェリリン・ハイドから今日の整備データだ。」

「おお、わざわざすまん。」

「構わない・・・イアン、そのデータは？」

「これか。ティエリアの置き土産の一部だ。まあ、さっぱり解析できないんだがな・・・」

2人はモニターに目を向ける。モニターには先ほどのデータ、もと、文字の羅列が映し出され、解析のツールが静かに読み込みを続けている。

「『謡う石』」

刹那が小さくつぶやくが、イアンは気付かない。

刹那もどうして自分がそのプログラムの名前がわかったのか分からない。

「そろそろ交替の時間だ。行ってくる。」

「おう、行ってこい。刹那、ちゃんと休憩を取るんだぞ」

「・・・わかってる」

出て行った刹那の分かりづらいが不貞腐れている様子にイアンは笑う。だいぶ、表情が出るようになったと思う。会わなかった4年間に何をやっていたのか気になるところだが、わざわざ聞くのも野暮なものだ。自然に話してくれるといい、伝えることも覚えるべきだ。それが出来るようになった刹那を想像する、想像できる、ああ、成長したな、変わったなとイアンは思う。父親の心理だ。

（さて、いつまでも見ててもわからんし、他の解析をやるか）

そうしてデータは奥に仕舞われ、事件が起こるまでイアンの意識に上ることはなかった。

次回（嘘）予告

ドロイドの古い詩がその先を予見する。

「この先、お前さんは不思議なものを見るよ」

しゃがれた手からライルに渡された「もの」、それは彼を争いの中へと導いた。

次回「少女との出会い」 次回もお楽しみに

1話（後書き）

いろんな人書いているけど、イアンが出てくるのって確かなかったなあ・・・あとヘリコプター改造したいなあ・・・が書き始めた理由です。

あと、コイツってなんですか？淡水魚です。ぐらい恋愛に関しては明後日の方向に向かうと思います。

2話（前書き）

一度中身が飛んだあと、ふて腐れてホラーぽいもの書いてました。遅れました、すいません。ごめんなさい。謝らして下さい。

文章を書くとき脳内の映像から起こしてるので、テンポが悪いです。

また、作者の偏った知識と偏見のもと書かれているため読みづらい上に短いです。

2話

輸送艦には自動航行システムが付いているので人がする事は少ないのだが、一人は常に計器に目を向けていなければならない。特にCBのような非合法の組織ではちよつとした事でも非常事態に陥るのであまり気を抜いてはいられず、意外に気を使う。今はロックオンが操舵について、次は刹那だ。

刹那がブリッチに入ったとき、そこにはロックオンのほかにシェリリンがいた。輸送艦の整備を行っている彼女の足元には端末のつながった赤八口。オレンジのロックオンの八口は操舵の手伝いをするため操舵パネルにマウントされている。

「セツナキタ。セツナキタ。」

八口達は挨拶するように上部のカバーを動かす。

「ロックオン、交代だ」

「少し早いんじゃないの？」

ロックオンが叩いたモニターの時刻は交替の一時間前を指している。今日行った機体テストのレポートを提出すれば、操舵の交代まで刹那はオフに入る。レポートはイアンに提出したからこの一時間は貴重な休憩時間だ。ロックオンは言外に休んでおけと言っているのだが、その意図が分かっているにも刹那は無視することが多い。

「お前はミッション明けで疲れているだろうからな、それにこの前30になったから体力が落ちる可能性がある」と聞いた、あと、テイエリアから年寄りには大事にするように言われた。」

「俺はそんな年じゃねえよ、大体、たった数カ月で一気に体力が

落ちてたまるか」

ああ、とロックオンは呆れたようにため息をついた。何に對してため息を吐きだしたのか、本人にも分からない。

「そうか」

刹那は氣に留めず、そのままロックオンの隣に座る。別にかからかいで言ったわけではなく、ティエリアから聞いた話をそのまま鵜呑みにしただけだった。

「そうなの？」

かわりにシエリリンが笑うように言う、掬うネタを見つけたと目を輝かせた。その様子にロックオンはもう一度ため息をつく。

「幸せ逃げるよお。」

「この程度で逃げる幸せならないのと同じだ。」

2人はなんだかんだ言いあいながらも、仲がいい。たぶん、ミレイナとアニューのおかげなんだろうなと、はたから見えていた刹那は思った。兄弟とはこういうモノなのかもしれないとも。

認識コード ***** 刹那・F・セイエイ

接続開始

プログラムが動き出した。止める者は誰もいない。その起動とコンマの差で刹那は頭を抱えた、その瞳は電子の金色を帯びている。頭痛というより、自分の中に何かが入ってくる不快感に守るように

手で頭を覆う。目はかすむし、雑音がひどい。

「おい、刹那！どうした!？」

「え？急に何？」

異常に気付いた二人が刹那に駆け寄る。

必要データのダウンロード開始

90% 100% 終了

第一シークエンス

目的地 新暦0075 ミッドチルダ郊外

搜索完了 付近1Km内の監視機器、生物の存在なし

艦内の人員 4名の所在、状態の確認終了

GMフィールド展開 魔法式展開

モニターをはじめとする内装、外装、積みれた小型艇やMSの表層にも青い光が奔る。光は鼓動を打つように瞬く。回路のような幾何学的に奔った光は消えることなく鈍く光り続けている。

やがて、刹那を起点として奔った光が人間以外の全てに行き渡った。

転送開始 終了まで1330秒

次回（嘘）予告

その国では王子に継承権は与えられない。故に王族でありながら、貴族達に疎んじられていた。

「ニール、こんなところにいたのか。妹が心配していたぞ。」

「ヴィヴィオが？」

「そうだ。行ってやれ、二週間振りだろう」

それでも彼は幸せだった。優しい両親、愛おしい妹、信頼のおける女王騎士。そんな穏やかな日常が続くと願っていた。
だけどそれは破られる。

次回 「追い立てられた持たぬ者」 次回もお楽しみに

2話（後書き）

後半おかしいのは、上手く文章化出来なくて繋げられなくて、そのままにしたからです。ネタすら仕込めなかった。

追記

ニールはライルのキラキラ三倍って聞いて。あれ？キラキラってなんだっけ？王子か？自分が知っている王子で最もキラキラだったのは幻水5だなといらん着地した。そして、失敗した。

小話 子守りの話（前書き）

こんな風にキャラクターが壊れますの一例。
自分のなかで刹那さんはこんな感じです。
ヴィヴィオごめん。

小話 子守りの話

一人目 刹那

赤と緑、例えるのなら宝石のような硬質な光、そのクリスマスカラーな色違いの大きな瞳がじっと見る。瞬きを忘れたように動かない。

対峙するのは琥珀色、夕日で焼かれた大地の鋭い眼。少しの動きも見逃さないようにじっと見る。

ただじっと見つめあう。

そこに甘い雰囲気はなく、むしろ、決闘や果たし合いのような闘気が満ちている。互いの動作を見逃すまいと、一切の外部を排除する。それは騎士が行う儀式のようだ。だが、その静かな、張りつめた空気は外部からの介入によって破られた。

「ヴィヴィオも刹那さんも、二人して何しているんですか？」

訓練を終えた六課のメンバーがヴィヴィオを夕食に誘いに来たのは、二人が動かなくなつて30分ほど経ったころだ。

近くではアイナが困つたように笑つて、ザフィーラは丸まって顔をそらしている。

実は質問を投げかける前に、アイナとザフィーラに念話で問いかけたのだが、笑つてごまかされた。

彼らも二人が何を行っているのかよくわからないらしい。

そして、アイコンタクトと力関係の結果からスバルが質問を投げかけることになった。

「「にらめっこ」」

少しの沈黙の後、二人は答えた。目は逸らさず、口元だけで答える。二人とも顔にも声にも表情が出ていない。

二人が答えてくれたことにスバルは少しの安堵を得たけれど、別の疑問がわいてくる。

「・・・えつとお・・・面白い？」

再び質問。この時、えつとおの部分では目がフラフラとさまよい、二人を直視できていない。

「「おもしろい」」

やはり、顔を上げてはくれないが返事は返ってきた。だが、二人とも表情が出ていない。とても楽しそうには見えない。

「あ、うん、そっかあ。・・・あのさ、もう夕食の時間だから、終わりにして行こうよ？なのはさんも待ってるよ。」

「うん、行く」

「了解した」

握った手を上下上下交差して上下して、離して二回手を打ち合わせる。

「それなんですか?!」

耐えきれなくなったティアナが手を打ち鳴らし終わる前に叫ぶ。それを不思議そうにヴィヴィオが見つめ、刹那は気にも留めずに立ち上がる。

「あのね、にらめっこで引き分けだったときこつするんだって」

さっきまでの無表情が嘘のように嬉しそうな顔でティアナ達に説明する。

「それ、誰に教えてもらったんですか？」

「ヴァイス陸曹だが」

エリオの質問に今度は刹那が答えた。

小話 子守りの話（後書き）

思いついて先に投稿しました。
頑張って一話書けるようにします。

小話 人が人を好きになる2、3の問題点について（前書き）

オリキャラを作つて、恋愛要素を入れようとした。
結果 無理だった。

人間の顔の美醜や服装のセンスがいまいち分っていない人間に恋愛をかこうというのが間違っていたと思われる。

自分の価値観でドキドキする時ってなんだろうと書いたので、見事に失敗しました。

そんな残念なオリキャラ ルーフ・ディアルウイド 性別XX
25歳

小話 人が人を好きになる2、3の問題点について

あるとき彼女は恋した。

見たのは彼の後姿。

独り立つその姿に恋をした。

「どうしよう」

ルーフ・ディアルウイド、25歳。

内気な彼女に小さな恋心が生まれた瞬間だった。

翌朝。

いつものように機動六課に出勤し、自分の席で仕事を行うが、身に入っていないのがすぐにわかる。

そのことに気付いた友人が昼休みにルーフを問い詰めた。

「うん。昨日ね、朝からタヌキの轢死体見れたから良いことあるかもって思ってた啦」

ほんわりとルーフは笑う、キラキラ目が輝いて、顔を紅潮させた。童顔の女性だったが故に辛うじて見苦しくはない、だが、言葉の端々に疑問が残る。

友人はそんな彼女の言動などいつもの事だとスルーした。

「・・・素敵な人に会って、一目ぼれしちゃった・・・」

きやつと手で顔を隠す。

しかし、友人の反応はツンドラの大地のように冷たかった。

気持ち悪いと言われないだけかもしれない。

「あいて人間？現在進行形で生命活動行ってる？」

「え？もちろんじゃない」

何当たり前のことを聞くの？と表情で語る。

返ってきた返事にイラッとする。

友人が心の中で、落ちつけ私、落ちついて10数えるんだと唱え

終わって、言葉を発する。

「・・・あんたが子供の時憧れた人は？」

「え？どうしたの急に？」

「いいから答えて」

「医学の発展のために、身を捧げた死刑囚」

「生きてないじゃない！」

思わず立ち上がって、怒鳴る。

人の多い食堂、当然目立つ。

すいませんと軽く謝って、再び座る。

「うん。ごめん。ちよつと、あんたが生きている人間に興味を持つって異常現象に動揺しちゃったみたい」

「本当にごめんって思ってる？」

「思ってるし、まだ、動揺してるのよ」

と友人は小声で怒鳴った。

「で、相手は誰？」

「刹那さん」

「・・・なんで？」

「目が光ってたから、どうしてそうなのかわかりたい」

「それは恋じゃねーよ！！」

友人の二度目の怒鳴り声だった。

小話 人が人を好きになる2、3の問題点について（後書き）

小学生の時本気で憧れました。死後、全身を冷凍し、何分割化して、mm単位で削って人体のスライドを提供してくれた方。初めて見たとき、本当に感動しました。すごかった、本当にドキドキです。ちなみに私は骨格標本になりたいです。

骨折とかまだしないので自信あります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8715k/>

リリカル OO RFS 1

2010年10月8日13時41分発行